

<原 著>

自閉スペクトラム症児・者の方言使用・理解研究の到達点と理論的検討

松本 敏治*・菊地 一文**・橋本 洋輔***

方言主流社会における発達障害に関わる療育・教育関係者の中で語られていた「自閉症は方言を話さない」とする風聞をきっかけにして、ASDの方言使用・理解の研究が進められている。これまで特別支援教育関係者を対象にした質問調査は、ASDの方言不使用という印象が全国で共通するものであること、および方言語彙使用が少ないことを示した。また、ASDの方言理解及びことばの使い分けについての実験的研究の結果は、方言理解自体にも困難を抱えることおよび相手との関係が不明瞭な場合のことばの使い分けに特徴的な反応が見られることを示している。これらの現象の要因として、ASDの社会性の障害に原因を求める説が松本らによって提出されていた。一方、音響音声学の研究者からはASDの音声処理にその原因を求める説が提出されている。本研究ではこれらの研究を概括し、ASDの音声処理、言語習得、そしてことばの使い分けの背景に存在する問題について理論的検討を加えた。

キーワード：ASD 方言 社会的手がかりへの選好

I. 松本らの研究

松本・崎原（2011）および松本・崎原・菊地・佐藤（2014）は、青森県津軽地方の発達障害に関わる人々の間に存在する「自閉症は津軽弁をしゃべらない」との噂をきっかけに自閉スペクトラム症（ASD）の方言使用に関する一連の研究を行っている。青森・秋田・京都・舞鶴・高知・北九州・大分・鹿児島及び国立特別支援教育総合研究所での専門研修のために全国から集った教員を対象に質問紙調査を行い、すべての地域でASD児・者の方言使用が地域の子どもや知的障害児・者に比べて少ないという判断が得られたことを報告し、「ASDは方言を話さない」という印象が全国で見られる普遍的現象であることを示した。さらに、青森および高知の特別支援学校（知的障害）の教師を対象に担当する児童生徒の方言語彙と対応する共通語語彙の使用について行われた調査の結果は、ASDを併存する児童生徒と併存しない児童生徒の間で方言語彙使用には差が認められたが対応する共通語語彙の使用には差が認められないことを示した。

このようなASDの方言不使用という印象は、ASD

が発話において示す独特のイントネーション・アクセント・プロソディ等の音声的特徴から生じているとする解釈が当初有力であった。しかしながら、松本ら（2011, 2014）の報告したASDの方言語彙の不使用という現象は、音声的特徴を原因とする説では解釈できないものであった。また、方言を話す際の話の間・声質・身振りなど社会的意味をもつパラ言語を適切に理解できていないためとするパラ言語理解障害仮説、対人的・社会的機能を含む方言終助詞を使用していないためとする終助詞意味理解不全仮説なども提案されていたが、同様に方言語彙の不使用という現象を説明できないものであった。ASDはテレビやDVDなどから共通語を学んでいるとするメディア影響仮説も提出されたが、そのような学習が生じる原因と過程を明白にできなければ説明としては不十分と思われた（松本・崎原・菊地, 2013）。

松本ら（2013）は、これらに替わるものとして「方言の社会的機能」（佐藤, 2002）にもとづく解釈を提出した。人は相手との心理的距離に応じて適切なことば遣いをグラデーションのようになった表現様式の中から選んでいる。方言主流社会では、方言を使用することは自分が考える相手との心理的距離が親しいことを表し人間関係を円滑にする機能を持っている。ちょうど、共通語圏における丁寧語からタメ口が相手との心理的距離を表すような関係が、方言主流社会におい

* 教育心理支援教室・研究所 ガジュマルつがる

** 弘前大学大学院教育学研究科

*** 国際教養大学日本語プログラム

ては共通語から方言として存在する。ASDの人々は社会性の障害のために、相手との心理的関係の近さを表す方言を用いない、もし用いたとしても相手との心理的距離に応じた使い分けには困難を示すとするものであった。

この解釈は、それまでの共通語と方言の差としてプロソディや品詞など言語あるいは音声上の差異に焦点をあてた視点から、ASDの中核症状である社会性の障害との関連で方言不使用の問題を考えるという意味で大きな転換点となった。

しかし、この説は次に述べる ASD 幼児の方言不使用の問題の十分な説明とはなりえなかった。幼児期における ASD の方言不使用は医療関係者からは幼児期の言語特徴の一つとして報告されているし（小枝, 2007; 木村, 2009）、青森県津軽地方の3才児健診に関わる保健士を対象とした調査からも幼児期においてもこのような印象が存在することが確かめられている（松本, 2016）。定型発達児（TD）といえども3歳幼児が方言と共通語の社会的機能の差異を理解できているとは考えにくいことから、方言の社会的機能に ASD 幼児の方言不使用の原因を求めることには無理があると考えられた。

松本・崎原・菊地（2015）は、幼児期における方言不使用について言語習得の問題と関連させて次のように論じている。方言主流社会において、こどもが方言と共通語にふれる状況は異なる。主に方言を話すのは、家族を始めとした身近な人々である。一方、共通語にはテレビやDVDなどのメディアを通じて触れることとなる。このような状況を考えると、方言主流社会の ASD 幼児は家族など周囲の人々が自らへ話しかけてくるあるいは周囲の人々とのやり取りの中で自然に聞こえてくることば（方言）ではなく、受動的に視聴するメディアから流れてくることば（共通語）あるいは療育・教育機関などで組織的に学習することば（共通語）を話すようになっていくように思える。

松本ら（2015）は、ASD はテレビやDVDのキャラクターの真似はできるものの、身近な家族の真似などに困難を抱えるという現象（Le Couteur, Lord, & Putter, 2013）へ着目し次のように論じている。

TD の子どもたちは、身近な人々と注意を共有し、その人々のことばや行動の意図を理解して模倣を行い、その上で人それぞれの特徴をとらえてその人らしい身振りやことば遣いを自分の中に取り入れる（自己化）（小山, 2012）。子どもたちは、ごっこ遊びにおいては演じるキャラクターによってことばを使い分ける

（例：奥様であれば「ごあます」ことばなど）。TD のこどもたちは、身近な家族やテレビのキャラクターの発することばや表現様式あるいは振る舞い等を共同注意、意図理解、自己化を通して獲得していく。そのため、方言主流社会においては、普段は家族が話していることば（方言）を話している子どもが、ごっこ遊びで共通語を使う人物（例えばセーラームーンや学校の先生）を演じる時には共通語で話すという事態が生じる。

この際に、使われる共通語は、その人物全体をキャラクターとして捉える自己化を基礎としているため、「月に代わっておしおきよ」というような決め台詞にとどまらず話し方全体が共通語化する。加用・新名・河田・村尾・牧（1996）の幼児のごっこ遊び場面での方言と共通語の使い分けについての研究によれば、3才児でさえ素の自分として話している時には方言、演じる人物（例：医師）になって発話する時には共通語という使い分けがみられる。

一方、共同注意・意図理解・自己化に困難を抱える ASD の子どもたちは、このような形でことばを獲得することは難しい。替わって、話し手の意図の理解などは不十分のまま、幾度も繰り返し視聴することができるメディアを通じてことばと場面をパターンとして結びつけたり、組織的教育・療育の中で場面と言語行動を結びつけたりするという形でことばを学習することとなる。

この現象自体は、居住する地域が共通語圏であるか方言主流社会であるかに関わらず生じていると考えられるものの、共通語圏では周囲のことばもメディアからのことばもともに共通語であるため、「テレビやDVDのキャラクターのような奇妙な話し方をする」というような印象にとどまるだろう。

松本（2017）は、家族6人全員が方言（関西弁）を話しながら本人のみが共通語を話す特別支援学校高等部に在籍する生徒の事例について、保護者への聞き取りおよび育児記録をもとに次のように報告している。2歳頃には言語の遅れを相談機関から指摘されていたが、3歳の頃から姉のために購入した学習教材ビデオの影響を受けてことばを使うようになり語彙も増えていった。育児日記には、となりのトトロのサツキの「お父さん、お弁当まだ？」というセリフを「お母さん、お弁当まだ？」と言い換えて言ってみるなど、ビデオやDVDのなかのセリフを場面に当てはめて使う様子が数多く記載されていた。母の印象では「(DVDなどの)記憶のストックの中から一瞬にして引き出して」

言っている感じであったという。さらに、語彙や文は飛躍的に増えていき元の素材が何かは分からなくなっていくた。

彼の場合、DVD などメディアを通じてことばを学習したために家族全員が関西弁話者であったにも関わらず共通語を話していたと考えられる。もし、彼が興味をもつメディアが方言であれば方言を習得したであろう。実際、スタジオジブリの「ホーホケキョ となりの山田くん」を熱心に見ていた時期には関西弁を話していたとの記録がある。

同様にメディアからことばを習得したと思われる事例としては、ドキュメンタリー映画「僕と魔法のことばたち」の主人公オーウェンが挙げられる。オーウェンは、ディズニーアニメを通じてことばを学び家族とコミュニケーションを作り上げていった。ASD の子どもが行うごっこ遊びにおいて、相手に「○○って言って」とセリフを割り振ってアニメ等の場面を再現するということはよく見られる。彼やオーウェンは、このようにしてメディアの中のセリフを実際のコミュニケーション場面に適用していくことでことばとコミュニケーションを作り上げていったと考えられる。

これらの結果をもとに、松本ら (2015) は ASD の方言不使用の背景には社会性の障害の問題が潜在しており、(1) 言語習得期においては共同注意・意図理解・自己化の不全が周囲の人々のことば (方言) の習得を妨げ、メディアあるいは組織的学習の中で場面とことばをパターンとして獲得し、(2) より年長においては心理的距離の表明・調整機能の理解・運用の不全のために方言を使用しないとした。

ただし、以前にはいわゆる「アスペルガー障害」と診断されたような言語発達に遅れを持たない ASD の場合には、たとえ方言を使用することができたとしても、相手との心理的距離の変化に基づく柔軟な方言と共通語の使い分けには困難を抱えると述べている (松本, 2017)。

以上のように、松本らは ASD の方言不使用についての調査結果を報告するとともに理論的検討を行っている。

II. ASD の方言理解と使用について

1. ASD の方言理解

しかしながら、これらの研究に関連していくつかの課題が指摘されていた。第一は ASD の方言理解の問題が検討されていないこと、第二は対象者が主に知的障害を伴う ASD であり知的障害のない ASD のデー

タがないこと、第三は調査が特別支援教育にかかわる教員による印象評定でありバイアスが存在する可能性があるという点である。菊池 (2018) は、これらの問題を解決するため知的障害のない ASD 児を対象に方言 (熊本弁) 理解を確認する実験的研究を行った。知的障害のない ASD 児 (小4~6) 15名と定型発達児 (TD) 26名 (小4) を対象に熊本県出身者が読み上げた熊本弁会話 (録音) を共通語に翻訳するという課題を課した。回答は文節ごとに3点 (理解できている) から0点 (理解できていない) で、熊本県出身者によって評定された。TD の平均得点が70.5点 (満点162点) なのに対して ASD の平均得点は44.5点で、有意な差があり、ASD は方言理解自体に困難を抱えることが示された。また、品詞ごとに分けて比較した場合、形容詞、副詞、連帯詞など社会的機能を強く有する品詞で有意な差がみられた。このことは知的障害のない ASD であっても方言の理解自体に困難を抱えることを実験的に示すとともに、方言の問題の背景には社会性の障害があるとする解釈を支持するものであった。

2. ASD のことばの使い分け

菊池 (2018) は第2実験として、人から話しかけられた時の方言を含むことばの使い分け (待遇表現) について実験的研究を行っている。対象者は知的遅れのない ASD 児15名 (小4~小6) と TD 児20名 (小4~6)。異なる場面、人物、及び話しかけに対して、どのように回答するかを対象児に尋ねた。場面は「依頼場面」「道案内場面」「謝罪場面」の3場面、対象児に話しかける人物は「同年齢の友だち」「先生」「家族 (母親)」の3名、話し方は「常態 (タメ語)」「敬体 (敬語)」「方言」の3種類である。例えば、友達が時間を尋ねてくる場合なら「今、何時か教えてくださいませんか?」「今、何時?」「今、何時か教えてくださいん?」などがある。結果は、相手が友達の場合にのみ、ASD と TD の間に有意差が見られた。また、条件によっては ASD 群の方が、TD よりも方言を使うという場合もあった。ASD の子どもが TD と異なる特徴的な表現をするのは、相手が友達という「いわば対等な立場で会話するという場面に限られ」ていた。先生や家族 (母親) のように本人にとって相手との関係性が明白な場合には ASD と TD の間には差がないが、友達という関係性が曖昧な場合に差が見られることを示している。

菊池の2つの実験結果は、ともに ASD が示す方言の問題の背景に社会性の障害が関連していることを示

唆した。

3. 社会言語学的アプローチと語用論アプローチ

菊池 (2018) の第2実験において示されたことは、遣いの問題は言語学の対象でもある。特に敬語の問題は言語学においても取り扱われているが、そのアプローチには社会言語学的なものと同語用論的なアプローチが存在する (滝浦, 2008)。敬語の使用・不使用が互いの社会的な立場によって自動的に決まるような場合はより社会言語学上の問題となる。一方、互いの親しさが変化したことによってことば遣いが変わるような場合はより語用論あるいは社会語用論的な問題となる。つまり、相手との関係性によることばの使いわけについてのルールには、少なくとも次の2つがある。1つは、先生と教師、上司と部下など社会的役割に基づいて社会的慣習として自動的に決められている場合で、話者によることば遣いの選択の自由度は低いものとなる。もう1つは、相手との親密性など心理的關係が影響するもので、この場合、話者は自分の考える相手との心理的距離に基づいてことば遣いを自由に意識的に選ぶ事ができる (堀田, 2015)。

ASDの言語の問題として語用論が取り上げられることが多いが、菊池の結果を考え合わせると知的な遅れのない ASD では明白な社会的関係に基づくことば遣いの選択 (社会言語学) には問題がないが、相手との心理的距離に基づくことば遣い (語用論) に困難を抱えるといえる (Table 1)。

Table 1 ことばの使い分けにおける社会言語学的アプローチと語用論的アプローチ

	社会言語学	語用論
外的制約 / 意図性	外的制約	意図的
選択	限定	自由
対象	一般的社会	個別の關係
意図・心理的距離の理解	不要	要
ルール	明示的	暗黙
ASD	可	困難

4. 方言を話すようになった ASD

松本・菊地 (2019) は、それまで方言を話していなかったが学齢期あるいは青年期において方言を使用するようになったとの報告のあった ASD5事例について調査している。事例の教師および保護者に対して方言の使用開始時期の対人的スキル・対人的認知スキルの変化について質問紙調査を行った。方言を使用し始め

たとされる年齢は、7歳、9歳、16歳 (2名)、18歳と様々であった。55項目の対人的スキル・対人的認知スキルについてその獲得時期を選択肢 (方言使用開始時 (1年前後)、方言使用開始以前、未獲得、不明) で問うとともに、「方言を話すきっかけ」「本人に見られた変化」「環境や周囲の変化」「家族との関係の変化」について自由記述にて尋ねた。調査時点で獲得されているとされた項目のうち、方言使用時期に獲得されたとする項目の割合は、97%、26%、71%、31%、75%であった。年齢および方言使用開始時期から調査までが、1名を除いて (7年)、1年から2年であることを考えると方言使用開始時期に対人的スキル・対人的認知スキルが急激に獲得されたように見える。自由記述からは、方言を話すようになったきっかけあるいは本人および周囲の変化として、他者への興味・関心など「同級生や職場の仲間との人間関係、が挙げられている。この結果は、方言を話すようになる時期については少なくとも学齢期から青年期まで幅をもっており、その時期に同級生や職場の仲間との人間関係が変化し、対人的スキル・対人的認知スキルに顕著な伸びが見られることを示している。ASDにおいても、方言の獲得あるいは使用において対人関係の能力および他者との関わりが関連していることを伺わせた

III. 音声の絶対音感者説

これまで述べてきた研究結果は、ASDに見られる方言使用や理解の問題が社会性の障害と関連していることを伺わせている。しかしながら、音響音声学の研究者である峯松は ASD の音声認識の側面から別の解釈を提出している (峯松, 2008; 峯松, 2013; 最相, 2012; 峯松・桜庭・西村・喬・前川・鈴木・齋藤, 2011)。

通常、人は他者の発話を聞いたときにその音声を母語の音韻カテゴリーに当てはめて処理していく。人の声を特徴づけているフォルマント周波数は、声道の長さや形状によって変化する。おなじ「おはよう」であっても、性差、体格、年齢によってさまざまなパターンの音声が存在する。どの人の声であろうと「おはよう」と認識するためには、様々なパターンの中から共通した特徴を抽出し同定できなければならない。いままで、人工的に作られた音声認識システムでは、これらの音を別々のものとして処理し、数万単位の多数の音のサンプルを集めることで対応してきた。しかしながら、人は数万の人の声を聞いた結果をもって、母の「おはよう」も父の「おはよう」も、

初めて出会った人の「おはよう」も同じものと認識できるようになるわけではない。場合によっては、ほんの数人の人々と接しただけで、「おはよう」という音の中に、「お」「は」「よ」「う」という音韻を認識できるようになる。そして、この音韻を自らの声帯や口を使って再生している。オウムのように声色を真似て再生しているのではない。

音声の模倣は動物においては稀なもので、小鳥、クジラ、イルカなどで見られるものの、多くの動物の模倣は基本的には音響の模倣、声帯模倣的な模倣にとどまる。霊長類でも音声模倣ができるものは人間のみである。

峯松によれば、世界一の巨人のような太い声、世界一の小人のような細い声で、母音だけを個別に聞かせた場合には同定が困難になるが、単語のような連続音（ただし無意味なモーラ列）にして聞かせた場合には、音を捉えることができる。つまり絶対的に音を同定しているのではなく、他の音との相対的な関係で音を同定している。巨人の「おはよう」も小人の「おはよう」もそれぞれの音声の連なりの中で、音韻を同定しているとみなすことができる。

峯松は、絶対音感者と相対音感者のアナロジーでこの問題を考えている。絶対音感者にとってはあるメロディーに含まれる音はキーが変化すれば同じ位置の音であっても異なる音名として認識できる。しかし、相対音感者にとってはキーが異なるとしても同じメロディーの中の同じ位置の音は同じ階名として認識される。この考えを音声の認識にも当てはめてみる。音の絶対的特徴で音声を書く者がいた場合には、人の話し方を模倣できたとしても、音声の模倣ではなく音響的・声帯模倣的な模倣になるであろう。

母親の話しかける「おはよう」は、その日の機嫌や状況によって変わる。話しことばを絶対的な音声の特徴で捉えているとしたら、方言を含めた個人差や状況に応じて変化する音声の中から同じ情報「おはよう」を同定することが難しくなる。かわりにテレビコマーシャルやアニメの主人公の掛け声など音響的に全く同一の音が繰り返されたり、ニュースの冒頭の挨拶などのように音として似た形で繰り返されたりするものは認識しやすくなる。このように音を捉える者がいたとすれば、音声を獲得しても方言（周囲の人々のことば）ではないかもしれない。音声的特徴の変化が少ないメディアからのことば（共通語）の方がより獲得しやすくなる。

この説は、ASDでよく見られるエコラリア、独特

の話口調や時に報告のある「方言が聞き取れない」という現象を説明できるように思える。

乳児は世界中で使われる音素を識別することができる。しかし、この能力は次第に失われ、生後1年になるころには母語で使われない音素の識別は困難になっていく。一方で、例外として母語の中になくても弁別可能な音もあれば、最初はいまうまくできないが次第に弁別できるようになる音もある。後者の一例として /r/ と /l/ の音がある。これらの弁別は、英語乳児でも最初からできるわけではなく、生後6ヶ月頃の弁別の正解率は65%で日本の乳児と変わらない。ところが、12ヶ月ころになると英語乳児の正答率は上昇するが、日本語乳児の正答率は下降する (Kuhl, Stevens, Hayashi, Deguchi, Kiritani, and Iverson, 2006)。成長するにつれて弁別力が上がる音というものもあるらしい。乳児は、どの言語にも使える「言語一般向け処理」から、「母語に最適化した処理」に移行していく。日本の子どもであれば、生後1年前後の間に「日本語耳」を獲得し、逆に外国語の音の違いの弁別は困難になるが、日本語に必要な音の識別はできるようになり、⁶周りの大人が話す音声を、まさに日本語の語彙の形で聞く、ようになる (馬塚, 2012)。生後7ヶ月の時の母語の弁別はその後の言語発達を促進させるが、外国語の音の弁別がよくできている乳児の場合には語彙発達や文理解が遅くなる (Kuhl, Conboy, Padden, Nelson, and Pruitt, 2005)。子どもの音の聞き取りは後天的に母語の発話にさらされることで母語の音の識別に特化していくようになり、そのことが言語発達に大きく影響していると思われる。ASDでは何らかの原因でこのような過程が妨げられているのかもしれない。TDの子どもは人の声、特に子どもに向けられた育児語のような抑揚の大きな高いピッチの話し方を好むと言われる (Abraham, Staska, Cooper, and Berman, 1997)。しかしASDでは育児語よりもコンピュータ合成音や、ガヤガヤした騒音を好むこと、さらに育児語への選好の度合いが言語発達と関連しているとする報告がある (Paul, Chawarska, Fowler, Cicchetti, and Volkmar, 2007)。

ASDは音のピッチや大きさを聞き分けることに優れた能力を示し、特に音楽サヴァンというようなレベルでなくとも音の高さの記憶には優れている (Heaton, Hermelin, and Pring, 1998)。このような優れた音の認知能力は言語音の認知でも同様であり、ASDの音声認知自体がTDに比べて劣っているという証拠はなく、TDと同等かそれ以上だと思われる。逆に、この

ような優れた音の認知が言語習得を妨げる可能性も示唆されている。Jones, Happé, Baird, Simonoff, Marsden, Tregay, Phillips, Goswami, Thomson, and Charman (2009) の ASD 青年を対象とした音の識別に関する研究は、グループとしてみた場合には ASD と TD では音の認識には差がなかったものの、ASD の20%が稀な識別能力を示し、彼らは幼児期の始語に遅れが見られた。このことは、音の認識能力の高さが言語習得を妨げているように見え、峯松の音声の絶対音感者説を支持しているようにも思える。

これまでも ASD の方言不使用を説明する解釈として音声処理の特性が関連しているのではという指摘があった。ただしそれらは共通語の音声の特徴が方言に比べて処理しやすいなどのように、方言と共通語の音声の特徴の差にその原因を求めるものであった。しかし、もともと東京の一方言を基盤にした共通語が、たまたま全国の他の方言よりも音声の特徴のゆえに ASD にとって処理しやすいものであったとの説は合理的とは言い難く、この解釈を採用しなかった(松本・崎原・菊地, 2013)。一方、峯松の解釈は共通語と方言が使用される状況に焦点を当てているという意味で異なる。方言を周囲の人々のことば、共通語をメディアのことばとみなす点では、松本のこれまでの解釈に通じている。

つまり、松本の説と峯松の説はことばの使用される状況に着目しているという側面では一致しているが、次の点で異なっている。松本が周囲の人々が使用することばの習得において共同注意・意図理解・自己化など社会性の問題を重視するのに対して、峯松は音声処理の問題など感覚の特異性を問題としている。

IV. 社会的手がかりへの選好

峯松の説と音声処理の発達(音韻カテゴリー化)の議論からは、ASD の音韻カテゴリーの不十分さの背景には、人の声への注目の問題が考えられる。TD の乳児は、育児音を始めとする人の声を選択的に聞くことで音を適切にカテゴリー化(峯松の説なら相対音感化)することができるようになる。一方、ASD は人の声への選好の弱さにゆえに「音声の絶対音感」の状態が続き言語発達に遅れを生むのかもしれない。

また、このような他者の発する社会的刺激への選好の問題は音声にとどまらない。一般的に ASD の人々は人の表情の理解に困難を示すと言われてきたが、研究の進展とともに ASD も TD と同じように表情を理

解することが可能だとする研究が多数出てきた(別府, 2018)。実験場面で使われるようにはっきりした表情を、時間をかけて判断させると ASD でも表情を理解できる。しかし曖昧な表情を短期間提示した時には成績が低下する。別府(2018)は、情動の理解には自動的処理と意識的処理があり、ASD は自動的処理に問題を抱えると主張している。

さらに社会的な情報を処理する脳内の「社会的ネットワーク」のパターンが ASD と TD とで差があるとの報告が多数ある一方で、差がないという報告も少なくない(千住, 2018)。画面上に提示した顔写真に注視点を示し教示で注意を促した場合には、ASD と TD で差がなくなるとする報告もある(Hadjikhani, Joseph, Snyder, Chabris, Clark, Steele, McGrath, Vangel, Aharon, Feczko, Harris, and Tager-Flusberg, 2004)。また、あくびの伝播の研究も注意の問題を示唆している。あくびの伝播はチンパンジーでも見られる現象であるものの、一般的に ASD ではあくびの伝播が少ないとされている。しかしながら、被験者が顔の映像をみた瞬間にあくび映像を流した場合、ASD と TD の間であくびの伝播に差は見られなくなった(Usui, Senju, Kikuchi, Akechi, Tojo, Osanai, and Hasegawa, 2013)。

このような結果は、ASD における社会的刺激への自発的注意(選好)の弱さを示している。この社会的刺激への選好の弱さは生後かなり早い段階から生じており、後に自閉症の診断を受けることになった子どもの場合、ビデオ映像中の登場人物の目への注意行動が生後2～6ヶ月の間に減少することが見い出されている。

小嶋(2019)は、ASD 児が療育のために開発されたロボット Keepon と遊ぶ様子を「ASD 児の多くは、最初はものらしく振る舞うロボットとの予測可能なインタラクションから始まり、徐々に視線や感情といった社会的シグナルに気づいていき、Keepon とのやり取りを楽しむようになっていった」と記述している。小嶋は、このような社会的やり取りが生じた原因として次のような仮説を提案している。TD の子どもは他者と接するときその人が発する体の動き、表情、声などの「生データ」から「心理化フィルタ」を通すことで不必要な情報をカットし視線や感情、心の情報を読み取るようになる。一方、ASD はこの「心理化フィルタ」がうまく働かず相手の発する多量の「生データ」をそのまま受け止めてしまい、相手との社会的交流に困難を抱える。ところが、Keepon は動きや造形がシ

ンプルで視線や感情だけを表すようにデザインされているため、心理化フィルタが十分に働かない ASD 児でも表情、身振りから心の情報を読み取ることができ交流が可能になる。

人は外界にある刺激をフラットに受け止めているわけではなく、そこに存在する社会的手がかりを選択し注目するメカニズムを有する。このような社会的刺激への着目（社会的手がかりへの選好）をもとに他者の注意や感情さらには意図などの他者のもつ心的状態が推論・理解されるようになる。TD のこのような社会的手がかりへの選好は、意識的・意図的に行っているものではなく自動的に生じると考えられる。

社会的手がかりへの選好は、2つの意味で重要である。第一は、表情・身振り・声の調子に「自然に、着目できることが、他人の心的状態や意図を読むスキルを発達させるという対人的認知スキルの習得という意味である。第二は、今現在自身の目の前にいる相手の心的状態や意図を理解するという意味である。

その意味では、ASD が示す社会的手がかりへの選好の弱さは、対人的認知スキルの発達を妨げるとともにそれを獲得していたとしても「自然に、活用することには問題を抱える可能性を示唆する。

また、知的に高い当事者の中には「観察する技術と論理的な分析によって」人の気持を読んで社会適応するものがある (Robison, 2012)。

V. 方言獲得・使用のための3つのプロセス

「音声の絶対音感者」説は、ASD の方言理解・使用の問題に新たな視点を示した。ASD の方言理解・使用の問題の背景には、意図理解等の困難 (松本ら, 2015)、方言の社会的機能の理解困難 (松本ら, 2013) に加えて、音の聞き取りの問題が関わっている可能性がある。

現在、ASD の方言不使用の原因としては、次の3つが考えられる。

- (1) 絶対的特徴による音声の聞き取り
- (2) 共同注意・意図理解・自己化による周囲の人々のことばの習得の困難
- (3) 方言の社会的機能の理解・適応の困難

松本は、幼児期の ASD の方言不使用については(2)を、より年長の ASD の方言不使用については(3)をその原因として推定した。(1) 音声の絶対的特徴による聞き取りは(2)あるいは(3)に先行して生じていると考えられる。あえて言えば、(1)は乳幼

児期、(2)は幼児・児童期、(3)は児童期以降に対応する問題かもしれない。

逆にいえば、周囲の人々のことば(方言)を適切に理解して使用できるためには、周囲の人々の音声を適切に聞き取り、共同注意・意図理解・自己化に基づいてことばを習得し、ことば遣いのもつ社会的意味を理解することが必要であるといえるだろう。

(2)と(3)は、ASDの中核症状である社会性の障害と関連していると考えられるが、(1)は感覚処理の特異性と考えられる。DSM-5の診断基準では、社会性のコミュニケーションの障害と、限定した興味と反復行動の2つの領域がある。感覚の異常は、後者の限定した興味と反復行動の下位領域に位置づけられている。そう考えると ASD の方言不使用の問題は、どちらも ASD の中核症状と深く関わっている。さらにこの背景には人が発する社会的手がかりへの選好の問題が関わっているかもしれない。

前述したように、TD の子どもは人の話しことばを育児語を好んで聞き、生後1年で周囲の人々の話しことばを母語の音韻カテゴリーに従って認識ようになる。しかし、育児語、つまり周囲の人々の話しかける音声への選好に弱さをもつ ASD では、周囲の人々のことばの音韻カテゴリーに基づく処理が十分に形成されず人の声を絶対的特徴で捉え続けるため、相手の機嫌や状況によって様々に音声的特徴が変化する周囲の人々のことばの習得に困難を抱え、テレビ等のメディアで繰り返される音声を獲得していく(音声の絶対音感者説)。

また、ことばの意味を他者の意図や心的状態に基づいて理解し推論するためには、他者の発する表情・身振り・声の調子など社会的手がかりに着目する必要がある。心的状態や意図の理解自体も、社会的手がかりへ着目する中で獲得されるものである。共同注意・意図理解・自己化による周囲の人々のことばの習得のためにも、社会的手がかりへの選好が前提となるだろう。

方言の社会的機能に基づくことばの使い分けは、社会的振る舞いの1つである。しかも、自分と相手の心理的距離を維持・調整する役割を担っている。心理的距離にもとづくことばの使い分けを理解し活用するためにも、相手が発する表情・身振り・声の調子などの社会的手がかりに着目できなければならないし、社会的手がかりのもつ意味も理解できていなければならない。

つまり、ここで取り上げた周囲のことばを適切に聞き取り、理解し、使用するためには、他者の発する社

会的刺激への選好が不可欠と考えられる。

VI. 終わりに

本研究は、「自閉症は方言を話さない」とする現象に関する一連の研究を概括し、現時点での理論的解釈を述べたものである。この現象を解き明かすためには、単に方言と共通語の音声的・言語学的差異にとどまらず、子どもの音声認識の発達、言語習得における共同注意・意図理解・自己化が果たす役割、そしてことば遣いという社会的ルールの背景にある心理的関係の理解に焦点を当てざるを得なかった。そして、さらにその背景として社会的手がかりへの選好の問題を措定することとなった。

滝川 (2018) は、子どもは大人と「二人三脚」で探索行動を行うことを通じて大人の捉える意味の世界を分かち合うようになると述べている。しかし、この「二人三脚」に遅れをもつ ASD は、自力で獲得してきた、オリジナルなもの見方、世界の捉え方をしようになると主張する。ここで取り扱った、母語の音韻カテゴリーによる音の認識、他者のことばや振る舞いを自らの中に取り込む自己化、相手との心理的関係に基づくことば遣いの選択という社会的ルールなどは、所属する社会集団の成員から受け継がれたものであり、滝川のいう「大人の捉える意味の世界、の一端といえる。子どもは「大人のもつ意味の世界、を取り込むことで、周囲の世界に適切に対応し、周囲の人々と円滑な関係を築くことになる。

方言使用という極めてローカルと思われた問題を解き明かすには、ASD と TD の育ちの差異についてさらなる検討をしていかねばならないが、残念ながら紙面の関係からここで触れることはできず別の機会に譲ることとする。

引用文献

Abraham, J., Staska, M., Cooper, R. P., & Berman, S. (1997) The development of infants' preference for motherese. *Infant Behavior and Development*, 20 (4), 477-488.

別府哲 (2018) 情動—ユニークなスタイル: 自動的処理と意識的処理. 日本発達心理学会編, 藤野博・東條吉邦責任編集, 自閉スペクトラムの発達科学. 新曜社, 47-57.

Hadjikhani, N., Joseph, R.M., Snyder, J., Chabris, C.F.,

Clark, J., Steele, S., McGrath, L., Vangel, M., Aharon, I., Feczko, E., Harris, G.J., & Tager-Flusberg, H. (2004) Activation of fusiform gyrus when individuals with autism spectrum disorder view faces. *Neuroimage*, 22, 1141-1150.

Heaton, P., Hermelin, B., & Pring, L. (1998) Autism and Pitch Processing: A Precursor for Savant Musical Ability? *Music Perception: An Interdisciplinary Journal*, 15(3), 291-305.

堀田隆一 (2015) #2119 社会言語学と語用論の接点. hellog～英語史ブログ, 2015/02/14, <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2015-02-14-1.html> (2020/01/07).

Jones, C. R. G., Happé, F., Baird, G., Simonoff, E., Marsden, A. J. S., Tregay, J., Phillips, R. Goswami, U., Thomson, J., & Charman, T. (2009) Auditory discrimination and auditory sensory behaviours in autism spectrum disorders. *Neuropsychologia*, 47 (13), 2850-2858.

加用文男・新名加苗・河田有世・村尾静香・牧ルミ子 (1996) ごっこにおける言語行為の発達の分析——方言と共通語の使い分けに着眼して——. 心理学, 18(2), 38-59.

菊池哲平 (2018) 自閉スペクトラム症児における方言理解と待遇表現の特徴. 熊本大学教育学部紀要, 67, 75-82.

木村直子 (2009) 幼児健康診査における「発達障害」スクリーニングの手法. 鳴門教育大学研究紀要, 24, 13-19.

小枝達也 (2007) 広汎性発達障害・アスペルガー障害. 母子保健情報, 55, 28-32.

小嶋秀樹 (2019) 認知科学—脳の認知粒度からみえてくる自閉症とコミュニケーション. 野尻英一・高瀬堅吉・松本卓也編著, 「自閉症学」のすすめ: オートイズム・スタディーズの時代. ミネルヴァ書房, 263-282.

小山正 (2012) 初期象徴遊びの発達の意義. 特殊教育研究, 50(4), 363-372.

Kuhl, P. K., Conboy, B. T., Padden, D., Nelson, T., & Pruitt, J. (2005) Early Speech Perception and Later Language Development: Implications for the "Critical Period". *Language Learning and Development*, 1(4), 237-264.

Kuhl, P. K., Stevens, E., Hayashi, A., Deguchi, T., Kiritani, S., & Iverson, P. (2006) Infants show a

- facilitation effect for native language phonetic perception between 6 and 12 months. *Developmental Science*, 9(2), 13-21.
- Le Couteur, A., Lord, C., Putter, M. (2003) (ADI-R) Autism Diagnostic Interview, Revised. Pearson Education, London. ADI-R 日本語版研究会監訳. 土屋賢治・黒田美保・稲田尚子マニュアル監修 (2013) ADI-R 日本語版マニュアル. 金子書房.
- 松本敏治 (2016) 自閉スペクトラム症幼児および定型発達幼児の方言使用について—青森県津軽地方の保健師への調査から—. 弘前大学教育学部紀要, 115(1), 83-86.
- 松本敏治 (2017) 自閉症は津軽弁を話さない 自閉スペクトラム症のこぼの謎を読み解く. 福村出版.
- 松本敏治・菊地一文 (2019) 自閉症の方言使用に関する事例的検討：学齢期・青年期に方言使用が見られた5事例について. 植草学園大学研究紀要, 11, 5-15.
- 松本敏治・崎原秀樹 (2011) 自閉症・アスペルガー症候群の方言使用についての特別支援学校教員による評価—「自閉症はつがる弁をしゃべらない」という噂との関連で—. 特殊教育学研究, 49(3), 237-246.
- 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文 (2013) 自閉症スペクトラム障害児・者の方言不使用についての理論的検討. 弘前大学教育学部紀要, (109), 49-55.
- 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文 (2015) 自閉スペクトラム症の方言不使用についての解釈—言語習得から方言と共通語の使い分けまで—. 弘前大学教育学部紀要, (113), 93-103.
- 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文・佐藤和之 (2014) 「自閉症は方言を話さない」との印象は普遍的現象か—教員による自閉スペクトラム障害児・者の方言使用評定から—. 特殊教育学研究, 52 (4), 263-274.
- 馬塚れい子 (2012) 乳児の音声発達. 日本音響学会誌, 68(5), 241-247.
- 峯松信明 (2008) 「あ」という声を聞いて母音「あ」と同定する能力は音声言語運用に必要か?—音声認識研究からの一つの提言— (話し言葉の音声). 日本語学, 27(5), 187-197.
- 峯松信明 (2013) 声とは、言葉とは、何か—音声研究を通して考えること. AJALT 日本語研究誌, 36, 17-21.
- 峯松信明・櫻庭京子・西村多寿子・喬宇・朝川智・鈴木雅之・齋藤大輔 (2011) 音声に含まれる言語的情報を非言語的情報から音響的に分離して抽出する手法の提案—人間らしい音声情報処理の実現に向けた一検討—. 電子情報通信学会論文誌, 94(1), 12-26.
- Paul, R., Chawarska, K., Fowler, C., Cicchetti, D., & Volkmar, F. (2007) "Listen my children and you shall hear": auditory preferences in toddlers with autism spectrum disorders. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 50(5), 1350-1364.
- Robison, J. E. (2011) *Be Different: Adventure of a Free-Range Aspergian with Practical Advice for Aspergians, Misfits, Families & Teachers*. New York: Crown Publishing Group. 藤井良江訳 (2012) 変わり者でいこう：あるアスペルガー者の冒険. 東京書籍.
- 最相葉月 (2012) ビヨンド・エジソン：12人の博士が見つめる未来. ポプラ社.
- 佐藤和之 (2002) 人はなぜ方言を使うのか. 國文学, 47(11), 88-95.
- 千住淳 (2018) 自閉症の体験世界：認知・社会脳. そだちの科学, 31, 39-45.
- 滝川一廣 (2018) 自閉症スペクトラムにおける体験世界：精神病理. そだちの科学, 31, 33-38.
- 滝浦真人 (2008) ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス—その語用論的相対性をめぐって—. 社会言語科学, 11(1), 23-38.
- Usui, S., Senju, A., Kikuchi, Y., Akechi, H., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2013) Presence of contagious yawning in children with autism spectrum disorder. *Autism Research and Treatment*. 20133 Article ID, 971686.1-8.

(2020. 2. 14受理)

Research Achievements in Use and Comprehension of Local Dialect in Japan on Children/Person with Autism Spectrum Disorders.

Toshiharu MATSUMOTO

Gajumaru Tsugaru : Institution of Support for Individuals with Developmental Disabilities

Kazufumi KIKUCHI

Graduate School of Education, Hirosaki University

Yosuke HASHIMOTO

Akita International University

There is a rumor among some teachers of special support education at Tsugaru Area in Aomori Prefecture in northern Japan. “Children with Autism do not speak Tsugaru dialect.” A series of studies on the use of local dialects were conducted. The results of the studies indicated the following: 1) the impression with non-use of local dialect in ASD is widespread on the teacher of special support education, 2) the students with ASD in special education schools do not use vocabularies in local dialects. Also, experimental studies report that children with ASD in local dialect society have a difficulty of comprehension of dialect in compared to children with typical development and that children with ASD show characteristic patterns in the change of speaking according to the relationship and scene. As a cause of this phenomenon, Matsumoto et al. (2017) cited social disability relative to the social function of local dialects. On the other hand, a researcher of acoustic phonetics points out the peculiarity of auditory processing in ASD as the cause. Based on these studies, the difficulties in which children with ASD show in use and comprehension in local dialects are discussed.

Keyword: ASD, local dialect, preference to social stimuli